

たりして過ごします。Kちゃんはお砂場に行きました。

Rちゃんはただただ歩き回っています。あんよが上手になったRちゃんは、二本の足で立って歩くというそのことが嬉しくてしょうがないようです。Mちゃんはいつものとおおり、まずブランコ。公園のすみっこにあるブランコでお母さんと二人だけの時間を過ごすことは、Mちゃんにとって一日の始まりの儀式のようなのです。あつ、元気のいいTくんがやってきました。来るなり

「おばちゃん、ブランコしよう。新幹線して！」

と、私の手を引っ張っていきます。先週した新幹線、ここがとても楽しかったのです。そのつづきです。Tくんは誘われて私もいよいよ活動開始です。私の胸の高さまでTくんを乗せたブランコを引き上げ、止め、

「新幹線 発車！」

の声と共に両手を放します。そのスピード感、ジェットコースターにも似たスリルが何とも言えないようです。

「もういっかい！」

何回でも声がかかります。Kくんもやってきました。A

ちゃんもやってきました。このようにして遊びはもりあがり、気持ちも高まり、大きい子たちは友達同士、小さい子たちは一人一人マイペースで大人の手を借りずに遊びだします。そうしてお昼、子供たちの遊びの様子を見て、

「お弁当にしましょうか。」

と、声をかけました。あれ、一歳のHくんが突然水道の方へ向かってよちよちと歩きだしました。私は思わず近くにいたお母さんと目を合わせて微笑してしまいました。もうお弁当の意味がわかるんですね。お弁当の前には手を洗わなくっちゃと、水道に向かったわけです。

シートを敷いて、みんなが手や足を洗って集まると、絵本劇場の始まりです。今日は『さんびきのやぎのらがらどん』の話にしました。それが終わると次はお弁当配りです。子供たちのお弁当を私の前に集め、

「Tくん Tくんは どこでしょうか？」

「Tくんは ここです ここにいます？」

「はい、Tくんどうぞ」

というようにして一人一人配っていきます。Tくんは少し顔を赤らめながら元気よく手をあげました。Kくんは下を向いてしまいました。Aちゃんはニコニコ顔になりました。Mちゃんはママの後ろにかくれてしまいました。子供同士名前を覚えてくれたらいいな、と思いはじめたお弁当配りですが、子供たちはたいへん気に入っているようです。家でもやっつと子供にせがまれるのだから…。さて、みんなで「いただきます」をして、やっとお母さん達いろいろ話し合える時がきました。今日の話題提供者はSさんです。

「今、子育てをしていて困っていることや悩んでいること、直接子育てには関係ないことでも、気になること、考えていることなど、みんなの意見を聴きたいことがあったら話してください。」

と、Sさんに声をかけますと、
「そうですね…。この頃、三歳のYがすぐ『食べさせて』とか、『バジャマ着せて』とか、言うんです。もう自分でできることなのに…。自立というものをどう

育てたらいいのか悩んでいます。下の子（一歳）は下の子で自分ではまだ何にもできないのに何でも自分でやりましたが困っていますし…。」

と、話してくれました。すると他のお母さん方がいろいろな感想や意見を言ってくれます。

「うちの子も同じよ。甘えているんじゃないのかしら。」

「下の子のように色々世話をしてもらいたいのよ。」

「下の子がいなくても三歳児ってそういうところがあるみたい。うちの子は二人とも三歳の時、下に兄弟はいなかったけれど、お兄ちゃんになったり、赤ちゃんになったり、いそがしかったわよ。赤ちゃんをやっている時はもうハイハイしちゃって、あばばしか言えないの。もちろん、ご飯もひとりじゃ食べれなくなってしまうの。『そんな馬鹿なことをして、ほらちゃんと食べなさい。』なんて怒るとかえってだめで、こちらもその気になって『ああ、よしよし、ほうらおいしいわよ。まんまですよ。ああんしてごらん。』なんて何回

か食べさせてやると満足して、またお兄ちゃんに戻っていたわ。」

私も意見を言います。

「私も甘えているんだと思うなあ。Yくんは二歳そこそこでお兄ちゃんにならされてしまったわけでしょ。がまんさせられたことも多かったんじゃないかしら。やって言うときはやってあげていいんだと思うの。でも人のこと言えないわ。私も息子によく言っているもの。『そんなことぐらい自分でできるでしょ』って。だけど、それって意地悪なのかもしれないわね。。自分でもうできることなのだから、幼稚園だったら一人でする訳でしょ。自立できていると行っていいんじゃないかしら。下のNちゃんの『自分でやりたい』という気持ちを汲んであげて、手をだすのをぐっとこらえて見守ってやる。必要なだけ手を貸してあげて、成功感を味わわせる。これが自立を育てるということで、今が大事なんだと思うわ。」

するとSさんが

「ああ、もしかして、私さかさまなことをしていたのね。」

.....

と、このように私達が話をしている間に子供たちは食事を終え、また遊び始めました。午前中はお母さんと一緒にでなければ遊べなかった子も、不思議と子供同士で楽しそうに遊びだします。一緒に絵本を聞いたり、お弁当を食べたりすると親近感が増すのでしょうか。それともお腹がいっぱいになると心もゴムまりのように弾んでくるのでしょうか。もうこの頃になると、公園も静かになり「たんぼぼの会」の子だけになっています。やがて母親たちも食事を終え後片付けをし、それからもう少しだけ——子供たちが納得するまで——遊んで、また三々五々帰っていきます。今日は一時四十分「たんぼぼの会」は終わりました。

*

これが私の作った「たんぼぼの会」の一日です。四年前、息子の入園を期に作りました。下の子が幼稚園に

入ってしまったらもう公園に行くこともなくなってしまう。幼い子と遊び続けたい。私が大学で学んだことや子育て十五年の間に身につけた知恵や知識を、若いお母さん達に少しでも伝えたい。たくさんのお母さんや子供達との出会いのなから、いろいろ学び取りたい。そんな思いからこの会を作りました。

いろいろな子がいます。元氣いっぱいここでここかと思えばまたあちら、公園のなかを走り回っている子。マイペースで黙々と遊んでいる子。すぐに空想の世界が広がったりいつも何かのつもりになって遊んでいる子。みんないい顔をしています。

でも時々何か気にかかる子に会う時があります。何がどうという訳ではないのですが、生き生きしていない、心のなかに何か無理矢理押し込んでいるものがあるような気がする、そんな子に会うと心が落ち着きません。声をかけてみたり、遊びに誘ってみたり、お母さんともいろいろ話し合います。よくあるのは、下に兄弟ができてまだ一年経たない時です。



「お母さんを取られちゃった。ぼくだって甘えたいのに。少しはぼくの面倒みてよ。赤ちゃんのことはちっとも叱らないで、ぼくばかり叱るんだ。」

そんな心の声が聞こえてくるようです。しかし、子供達は自分の口でこのように言うことはできません。子供自身何だか分からないのですから……。家での様子を聞いてみますと、言うことをきかなくなったとか、すぐ泣きわめくとか、おもろしが多くなったりとか、友達とすぐ喧嘩するとか、いろいろですが、まだこういう子供達は公園では元気がったりするのです。一番心配なのは「少し元気はないけれど、家ではとてもいい子です。」という子です。親は困ることがないので気づくのが遅くなります。でも私は気にかかってしかたありません。私の思い過ごしかしらとも思うのですが、違います。その子の気持ちや代弁してあげたり、心を癒してあげられるような言葉かけをしてやりますと、その時は何の反応がなくても、あとでちょこんと私の膝にのつきたり、私に話しかけてきてくれたりするのです。本当に子供って可愛いなと思います。私がお母さんに子供の気持ちをちゃんと伝えられ、お母さんがそのことを理解したとき、子供は元気になり、いい顔の子になります。

また、別な理由で心に不安があり生き生きとできない子もいます。お母さんに大きな心配事や悩み事のあるときです。子供のアトピーや言葉の遅れ、どもりが心配だったり、また、自分の子が乱暴で手が早く、すぐよその子をぶったり噛んだりしてしまうとき、それから幼稚園の入園間際もそうです。親が心配し不安になると、子も落ち着けずイライラし、症状がひどくなったりします。それを見て親はますます心配になり、子は子でそんな親の傍にいて不安になり、いっそう荒れてきます。悪く回りだしてしまうとどんどん悪くなってしまいます。この連鎖を断ち切り良い回りに変えるのは大人の側の仕事です。でもこれはたいへんな仕事です。こんなに心配はしなくてもいい、そんなに思い悩む必要はない、と、頭で解っただけではだめで、心からそう思わないと効果がありません。心からというのが難しいのです。ときに本がこれを救ってくれますが、一番励まされるのは、かつて同じようなことで悩んだお母さんの「大丈夫よ」の一言でしょう。また、同年代の子供を持ったお母

さんの「うちの子もそうよ」の一言です。それをお互いに聞くために「たんぼほの会」はあるのだといってもよいくらいです。ただ困るのは、周りのお母さん達の一言が、却って不安をつのらせる結果になってしまう時です。

「アトピーの子って湿疹が治っても喘息がでてきちゃったりするんですよ。」
とか、

「私の中学のときの友達に、どもりの子がいてね、大事なときになるとどもっちゃってかわいそうだったわ。」

等の言葉です。そんな時は私がフォローしなければなりません。私のもっている知識や経験、また今まで出会ったお母さん達や子供達から得た多くの実例などを伝え、「そんなに心配しなくても大丈夫よ」と話します。そうでないと、会をやっていること自体が却ってマイナスになってしまいます。

ただここで大事なことは、私とそのお母さんとの間

に、ちゃんとした信頼関係ができていくかどうかということなのです。そうした関係ができてないうちは、どんなに正しいことを言っても、「本当にそうかしら？」と疑われ、話は右耳から左耳へと通り抜けてしまいます。ちょっと横道に逸れますが、上の娘が中二の時、あるクラスの先生が一生徒の親の抗議がもとで、担任を外されるという事件がありました。先生の体罰が問題にされたのです。担任が変わると聞いた時、クラスの女子生徒は泣いていたということですし、娘もどうしてこんなことになったのかしらと驚いていたぐらいですから、たぶんそんなに悪い先生ではなかったのだと思います。先生としてはその子を直したい、との思いからしたことでしょう。ただ、その子との信頼関係ができていないうちに行われた体罰であったのではないのでしょうか。そうした体罰はただの暴力でしかないのです。愛の鞭にはなり得ないのです。若いその先生にはその辺の認識が欠けているのだらうと思います。信頼関係のないところからは何も建設的なことは生まれません。ただ誤解と反感、又は

無視しか生じないのです。「如何に早く信頼関係をつくるか」これがどんなに大事かということ、私は「たんぼぼの会」で学びました。そしてまた、いつも会で心がけてきたことも、このことでした。子供と親しくなるには、まず、その子の心に耳を澄まし、よく聞くことです。そして正しくそれが読み取れて、ちゃんと応えられたとき、私とその子は仲良くなれました。お母さんと親しくなるのには、その人の子を可愛がることです。私がお母さんを本当に可愛いと思っている、ということが伝われば、お母さんは心を開いてくれました。

随分と偉そうなことを言ってきましたが、もうひとつ分かったことがあります。それは、自分の子のことはよく見えているようでいて、実はそうではないということです。生活を共にしているものに見えるのは「今」の連続です。一週間前や、二か月前のわが子と、現在のわが子を比較するなど、なかなかできることはありません。「たんぼぼの会」では間を置いて子供達を見ていますから、子供達の変化や成長ぶりがとてもよく見えるの

ですが、わが子のこととなるとそうはいきません。ついでこのあいだも、息子の反抗を成長過程の一時の現象などと捉えられず、「みんなが甘やかすから悪くなったんだ」と考えて、やたら敵しい母親になって、ますます反抗されてしまいました。腹が立つやら、自信をなくすやら……。ひどいものです。わが子のこととなるとどうしてこんなに近視眼になってしまおうのでしょうか。本当に偉そうなことは言えません。でも、この悪戦苦闘ぶりを話していくことが若いお母さん達の元氣のもとになっていくように思います。これが大事なのではないのでしょうか。